

はじめに

本報告書は、研修事業「大学授業の自己改善法」の総括として毎年1回開催しているシンポジウムの、2000年度に開催したシンポジウムをとりまとめたものである。メディア教育開発センターでは、1997年より「大学授業の自己改善法」と題する研修事業を実施しているが、これは大学教員が日々の営みである自分の授業を振り返り、その改善をめざすことを目的としたものである。個別の研修での成果をより広く共有し、相互に議論を重ねる場として、1年間の総括としてシンポジウムを開催してきた。

自分の授業を振り返ってそれを改善するとは、ここ数年ようやく市民権を得てきたファカルティ・ディベロップメントという概念に内包されるものであり、ファカルティ・ディベロップメントという言葉を得ることによって、われわれの研修のねらいも、教員個人が独自に授業の改善を試みるという視点が、教員の間での情報の共有、さらには、大学としてどのように組織化するかという視点へと広がりをもつようになってきた。

それは、シンポジウムのテーマをみても明らかであり、1999年度の「かわる学生・かわる大学—学習支援の実践と課題—」、2000年度の「かわる学生・かわる大学—FD（ファカルティ・ディベロップメント）と授業改善—」、2001年度の「FD（ファカルティ・ディベロップメント）の運営を考える」というタイトルの変化は、大学としての組織化が重要な課題になってきたことをあらわしている。

1999年度のシンポジウムについては、メディア教育開発センター研究報告第22号『かわる学生・かわる大学—学習支援の実践と課題—』、2000年度については同研究報告第23号『かわる学生・かわる大学—FD（ファカルティ・ディベロップメント）と授業改善—』として取りまとしており、本報告書は、それに続くものとして位置付けることができる。

詳細は本文に譲るが、FDが、教員の自助努力や外部講師を招聘しての研修会を超えて、日常的な大学の活動として根づくには、どのような方法があるのか、それに至るにはどのような課題をクリアしなければならないのかについての3大学の事例発表と、ここ10年の大学改革のうねりのなかで、そうした試みがどのように位置づくのかを俯瞰した発表から構成されている本報告書が、少しでも多くの大学教員の方々に裨益すれば幸いである。

2002年3月5日

編集担当：

吉田 文・波多野 和彦